

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K03246

研究課題名(和文) 認知的側面と自己意識の諸側面とを関連づけた学童期の発達アセスメント

研究課題名(英文) Developmental assessment in school-age children in relation to cognition and self-awareness

研究代表者

竹内 謙彰 (Takeuchi, Yoshiaki)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：40216867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学童期における自己意識の発達の特徴を、20答法またはそれと類似した方法によって捉えることに主たる焦点を当てた。研究レビューでは、嗜好についての表現や自己の能力についての言及は小学生から中学生にかけてよく見られること、また、年齢が高くなるにつれ自己に対する評価が低くなる傾向があることが明らかになった。実証研究では、2019年度に収集したデータの分析をもとに、自己の構成の様相の検討ならびに、好き・嫌いといった嗜好に関わる表現や得意・不得意といった自己の能力についての表現の出現頻度や様相の検討を行い、その発達の变化の特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達支援を有効なものとするためには、発達の特徴を取り出すことが求められる。筆者も加わる研究グループでは、1歳から6歳の時期に相当する発達アセスメントを行う尺度の開発に取り組み、一定の成果をあげてきた。今回の研究においては、学童期における発達アセスメント尺度の開発に着手することをめざしたが、認知的な側面の実証研究がコロナ禍のためできなかったが、学童期の自己意識の特徴に20答法を用いて迫ることができた。このことは、学術的な面では学童期の発達理解に資するとともに、社会的には発達アセスメントのための基礎的知見の一部となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focused on clarifying the developmental features of elementary school children using Twenty Statements Test or similar tests. Through the review of prior researches, it was found that many elementary and junior-high school students refer to their tastes such as “like” or “dislike” and to self-efficacy such as “strong point” or “weak point,” and that the level of self-evaluations decreases with age. In our empirical research, we clarified the developmental features of elementary school children’s construction of their self, analyzing their description of “like” or “dislike” and “strong point” or “weak point”.

研究分野：発達心理学

キーワード：自己意識 学童期 20答法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、それまで数年にわたって継続してきた発達診断研究会の議論の中で得られたものである。同研究会の研究グループのメンバーを中心として、下記(3)に記すような幼児期の発達アセスメントのための尺度開発を行い、一定の成果をあげたことを踏まえて、幼児期の次の発達時期である学童期に焦点を当てた発達アセスメントを行うことが課題として浮上してきた。その際、一つはいわゆる9、10歳の発達の節目と呼ばれる発達の質的転換時期に焦点を当て、認知発達を中心としつつも、発達的特徴を取り出すためには学童期の子どもの内面に迫ることが必要ではないかとの考えを研究グループの共通認識として持ったことが、今回の研究の着想につながっている。

近年、発達アセスメントにかかわる研究は世界的に見て増加している。これは、自閉スペクトラム症などの発達障害を早期に診断し適切な対応(相談や療育など)を行う必要性が重要な要因となっている。発達障害にかかる発達アセスメントにおいては、従来の知能検査や発達検査の研究成果を踏まえつつ、障害特性と関連づけた新たなアプローチが採用されている。本研究は、そうした研究動向を踏まえつつも、発達障害に特化したものではなく、発達の質的变化を捉えることを位置づけている。その理由は、人間発達の共通性にかかる変化を抽出することに基づき発達課題を明らかにすることが、実りある教育実践にもつながるからである。

研究グループは、発達支援を有効なものとするためには、発達的特徴を取り出す仮説的枠組みとしての発達の質的転換期の概念が重要であると捉え、定型発達では1歳から6歳の時期に相当する発達アセスメントを行う尺度(当時は、「発達チェックリスト」という名称を用いていた)の開発に取り組み、一定の成果をあげてきた。開発された尺度によって収集されたデータに対し、申請者らは、強い仮説を理論上必要としないコレスポネンス分析を用いた分析を行い、理論から予想される発達段階ごとの構造を抽出してきた。幼児期の終わりころまでの発達的特徴を取り出すことはできていることから、今後、その先の発達的特徴をいかに取り出すことができるかが課題となっている。

研究開始当初の研究環境として申請者は、幼児を対象としたデータの収集や分析に習熟してきており、今回の対象年齢は異なるものの学童期の子どもを対象とした実証研究を開始できる条件は整っていた。なお、研究を遂行する上で必要となる機材や設備については新たに購入せずとも整っていたことも付け加えておきたい。

本課題の研究を遂行するにあたっては、協力してもらえる研究者が同じ大学あるいは比較的近隣の大学に所属しており、連絡は日常的に行える環境にあった。また、それぞれ現在までの研究・実践の蓄積をふまえた意見交換を行い、研究着手に向けての準備は整っていた。

2. 研究の目的

学齢期の発達的特徴を捉えるための尺度開発を行うことが本研究の主要な目的であった。焦点となるのは、発達の質的な転換が起こることが想定されている9~10歳頃の発達の節といわれる時期である。この問題に対して学術的エビデンスを提供しようとするところに本研究の意義がある。この時期は、認知的側面だけではなく、意志や感情の働きを含めた様々な側面での変化が生じる。

3. 研究の方法

本研究では、主として認知的側面を捉える測度によって尺度構成を行う点は、従来の知能検査や発達検査と共通するが、発達をトータルに捉える観点から、目的意識性や対人社会性の働きとも関連する自己意識の諸側面の検討をあわせて行い、学齢期の発達的特徴を描写するための理論構成をめざす。認知的側面における発達の質的転換を捉えるために、申請者が幼児期の発達尺度開発に関連する研究で用いたものと同様の多変量解析を用いた手法により分析を進める。自己意識の諸側面については、アセスメント方法の開発について探索的な検討を進め、認知的側面との関連の検討を行うことをめざす。

4. 研究成果

残念ながら、3年間の研究期間において、2つの到達目標(認知的発達については量的なデータに基づく実証的な根拠を提供すること、自己意識の諸側面と認知的発達との関連を捉えようとする)を十分達成することはできなかった。その主な原因は、2019年より始まった、新型コロナウイルスの全世界的な感染拡大の影響により、小学校での認知発達にかかわる量的調査の実施ができなかったことである。認知にかかわるデータ収集では、実際に学校現場に研究者が入る予定であったが、それが許される状況ではなかった。そうした状況でも、何とかかろうじて、自己意識に関わる調査データを収集することができた。それゆえ、到達目標のうち、小学生における「自己意識の諸側面」を捉えることについては、一定の成果をあげることができたといえる。

実際に主として行ったのは、小学生を対象として行った20答法を用いた調査結果の分析、ならびに小学生を対象とした20答法(ならびにそれと類似した方法)を用いた先行研究の検討であった。

20答法は、自己意識、自己理解を研究するために開発され、多くの知見が蓄積されてきた調査方法である。自分のことについての書字による記述を最大20回行うことが求められることか

ら 20 答法と名づけられた。他に、Who-am-I テストという呼称もある。

本研究の実証研究部分は、3 年間を通じて、20 答法を用いた小学生を対象とする調査のデータ（2019 年度に収集）をもとにした分析をもとに構成されている。調査の概要は以下の通りである。調査期間は 2019 年 7 月下旬～9 月上旬。質問紙を担当の先生が配布して実施した。回答時間の制限は特に設けなかった。参加児は条件（他者意識の視点）の有無によって、2 群に分けられた。『条件なし』グループでは「あなたのことについて書いてください」と教示された。『条件あり』グループでは、「あなたのことをよく知らない人に、あなたのことを紹介してください」と教示された。

2019 年度には、対人援助学会第 11 回大会において「学童期における自己の構成の発達 20 答法を用いた分析」と題する報告を行い、2020 年度には、日本発達心理学会第 32 回大会において「20 答法の回答からみた小学生の発達の特徴 - 「好き」および「嫌い」の記述に着目した分析 - 」と題する報告を行った。2021 年度には、それまでの分析に新たな分析を加えた報告を行った（心理科学研究会、秋の研究集会、障害分科会（2021 年 12 月 12 日））。その報告においては、9、10 歳頃に注目する意味について、新版 K 式発達検査 2020 が標準化された際の各下位課題の平均通過日齢の傾向が、10 歳ころを境に全領域得点と課題の平均通過日齢との関係が線形的なものではなくなっていく傾向を指摘し、10 歳以降の発達を捉えるためには、課題に対する適応度の向上という側面ではとらえられない部分を捉えるアセスメント方法が求められることを指摘した。そのうえで、収集した 20 答法データに基づく分析結果が報告された。分析の視点は、ならびに好き・嫌いへの着目、ならびに得意・不得意への着目であった。

好き・嫌いに着目した分析からは以下のことが明らかとなった。「好き」と「嫌い」に共通した対象として多く選ばれたカテゴリーは、「食べ物」と「学び」であった。これらは小学生の好悪両面の感情に影響しやすい対象であろう。「好き」および「嫌い」における代表的な対象カテゴリーの出現率は、今次の調査においては 3 年生がピークとなりやすいことが示された。自らの嗜好性の書き言葉による表現は 3 年生ころに大きく向上するのかもしれない。

得意・不得意に着目した分析からは以下のことが明らかになった。「得意」の回答では、「条件あり」が「条件なし」より多く回答していた。「条件あり」では 3 年生で半数以上の参加児が「得意」なことについて回答しており、5 年生が最も多かった。「条件なし」では、半数を超えることはなく、3 年生が最も「得意」なことについて回答していた。「不得意」の回答は「得意」より回答数は少なかった。「条件あり」が「条件なし」より多く回答しており、4 年生が最も多かった。「条件なし」では、5 年生の回答が最も多かった。

文献研究（立命館産業社会論集、第 56 巻第 4 号に掲載）における目的は、小学生を対象者を含む 20 答法（Twenty Statements Test: TST）を用いた主として日本における諸研究の文献展望を行うことで、用いられた分析方法、とりわけカテゴリー分類のあり方について検討するとともに、小学生における自己理解の発達の特徴を明らかにすることであった。分析に用いられたカテゴリーの多くは記述の内容面の分類に関するものであったが、自己への評価を取り出す工夫もなされていた。カテゴリー分類後になされた分析では、カテゴリーの出現率を年齢群間で比較する手法がよく用いられたが、多変量解析によってカテゴリー間の関係性を集約する分析がなされた研究もあった。小学生期には外面的・具体的な属性を記述する傾向が強いものの、学年が高くなるほど内面的・抽象的な属性への言及が増加していた。対象の好き嫌いのような嗜好についての表現、あるいは得意不得意のような自己の能力についての言及は小学生から中学生にかけてよく見られるが、研究によってピークとなる時期は異なっていた。また、年齢が高くなるにつれて自己に対する評価が低くなる傾向がみられた。小学生の自己理解に焦点を当てるには、それに適したカテゴリー作成の必要性があることが示唆された。

20 答法は、回答の自由度が高く、自分に関わることであれば何であれ記述できることから、幅広く自己の諸側面を捉えられる技法である。しかし、自由度が高いことは、分析することの困難を意味してもいる。今回、小学生の自己意識を探るために 20 答法を実施することで、多くの知見を得ることができたが、それでもなお、収集したデータは、ここに記載できたことに尽くしえない内容を含んでいるように思われる。

20 答法の分析で得られた知見は、研究開始当初に企図していた学齢期のアセスメント項目の開発に、ダイレクトに結びつくものではない。それでも、自己認識の発達の特徴を捉える探針としての役割は担えるのではないかと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 竹内謙彰	4. 巻 第56巻第4号
2. 論文標題 小学生における自己理解の研究手法と見出された発達の特徴 日本における20答法を用いた研究を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館産業社会論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹内謙彰・富井奈菜実・松島明日香・松元佑・荒木穂積・中村隆一
2. 発表標題 20 答法の回答からみた小学生の発達の特徴：「好き」および「嫌い」の記述に着目した分析
3. 学会等名 発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富井奈菜実・松島明日香・竹内謙彰・荒木穂積・中村隆一
2. 発表標題 学童期における自己の構成の発達：20答法を用いた分析
3. 学会等名 対人援助学会第11回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内謙彰・松元佑・荒木穂積・中村隆一・松島明日香・富井奈菜実
2. 発表標題 自己意識の側面から見た学童期の発達の特徴
3. 学会等名 心理科学研究会秋期研究集会障害分科会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	荒木 穂積 (Araki Hozumi)		
研究協力者	中村 隆一 (Nakamura Ryuichi)		
研究協力者	松島 明日香 (Matsushima Asuka)		
研究協力者	松元 佑 (Matsumoto Yu)		
研究協力者	富井 奈菜実 (Tomii Nanami)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------